南葵音楽文庫アカデミー
THE ACADEMY OF NANKI MUSIC LIBRARY
Newsletter
南葵文華
2023.2.21
第 8 号

南葵音楽文庫 公開5年
はじめて知るその全貌と豊穣

2017年12月3日、和歌山で南葵音楽文庫の公開開始。爾来5年。この間、100年を超えるコレクションの歩みで、はじめて明らかにされた事実、コレクション形成の真実は、数え切れない。和歌山の、世界の人々に南葵音楽文庫を紹介する取り組みも重ねられた。その都度、講座等で話し、紀要に執筆して発表してきた。その成果のあらましを、公開から5年の区切りを迎え、ここに纏めてみた。　　（美山良夫、本文も）

▶プレオープン 2017.12.3

▶記念演奏会 2017.12.6

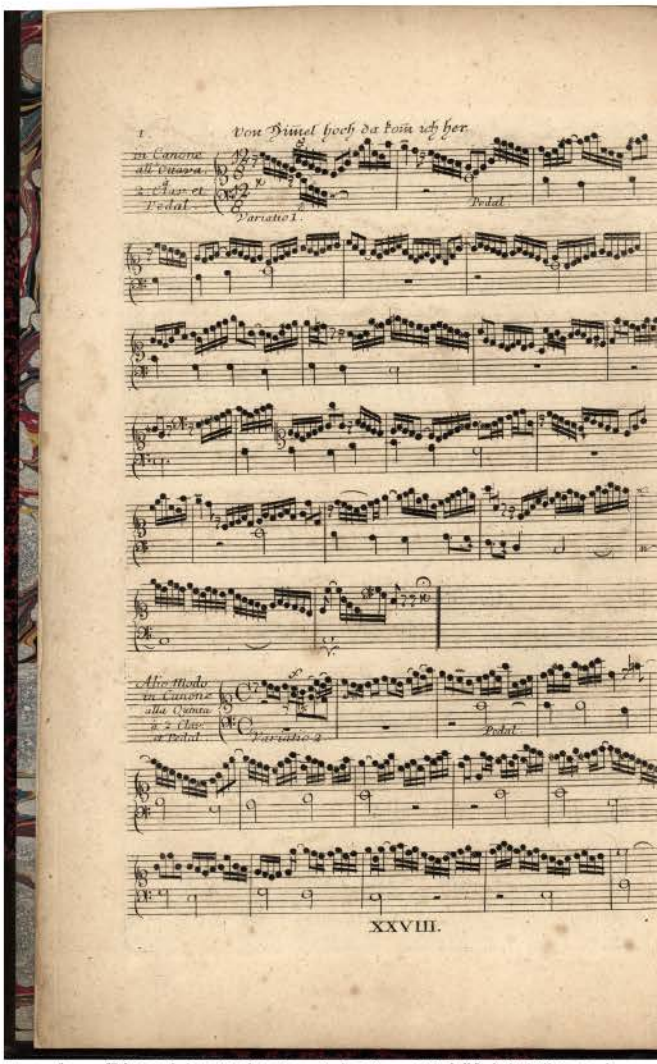
▶現在の県立図書館 2023.1.5

▶関係資料展示ケース

▶閲覧室にて

和歌山で公開が始まった日から85年と3日前の1932年11月30日、東京·麻布の南葵音楽図書館は閉館。戦前·戦中は寄託先の大学図書館で閲覧ができ、1970年前後には整理作業とともに、研究者向けに仮公開されてはいた。だが利用者は限られ、その全貌や内容はほとんど知られないまま星霜を重ねてきた。数奇な運命をたどりながらも根幹部分は維持保存されてきた。とはいえ、ほとんど人の目に触れることはなく、内容の調査もされないままであった。

2017年度から、和歌山県の委託により研究員グループが調査研究、教育普及、閲覧支援の業務にあたるようになった。まずは段ボールを開梱、南葵音楽文庫閲覧室に備え付ける資料の選定をしながら調査研究に着手。12月のプレオープン（部分公開）と同時に、講座や閲覧相談、問い合わせなどの業務も始まった。



▲J.S.バッハ《「高きみ空より我は来たりぬ」によるカノン風変奏曲》初版楽譜 1743 年

駒場時代の10年間
1967-1977

▲「特別公開 南葵音楽文庫」展会場風景 1967 年

▼『所蔵目録（貴重資料）』1970 年

1967年春、東京と大阪で「特別公開 南葵音楽文庫」展が開催された。1945年に戦火を避け疎開後、初の公開であった。以後、東京の赤坂溜池にコンサート·ホールと一体になった音楽資料センターを設置する目的で、(財)東京音楽文化センターが設立された。南葵音楽文庫は駒場の(財)日本近代文学館に搬入され、整理が始まった。

整理にあたっては、資料保全のため帙、箱、堅牢なバインダーが資料のサイズに合わせ準備され、パート譜等を収める丈夫な特注封筒が用意された。丹念な点検を経て内容が記載された封筒等、当時の整理は今もそのまま使用されている。

1970年には『蔵書目録（音楽書）』、『蔵書目録 貴重資料』を刊行。音楽資料センター開設に向け、多数の資料が精力的に追加購入された。同文学館で仮公開が始まると、国内外の研究者、演奏家が来訪した。

また文化庁の助成を得て、貴重資料のマイクロフィルム収録がおこなわれた。このときの画像は、後に慶應義塾大学デジタルコンテンツ統合研究センターによってデジタル変換され、大半がインターネット上に公開されている。

1977年、ホールを含む一連の計画は中止となり、そのための財団は解散、南葵音楽文庫は再び40年に及ぶ非公開の時代を迎える。

南葵音楽文庫 公開５年
2017年12月～2022年12月

文庫の内容 明らかに　蒐集の真実 解明すすむ

公開開始から５年。研究員一同は、南葵音楽図書館に由来する資料群を手にとり、内容を確認するとともに、その形成や蒐集の真実を、発注書などの関連資料を参照しながら解明してきました。個別の資料ごとに、来歴や利用について研究し、名前のみ知られ、具体的な内容はほとんど知られなかったコレクションを調査した結果、多くの発見や知見が得られました。その成果は、『南葵音楽文庫紀要』や各講座、重要資料報告会で明らかにしています。

収蔵資料：目録と紹介

カミングス文庫の現在、購入顛末

資料価値の中核を形成しているカミングス文庫は、1925年に英文目録が刊行され、駒場時代の1970年発行『蔵書目録 貴重資料』にはそのほぼ全てを収録、手稿楽譜については収録曲目まで詳記されました。音楽書について目録を作成［『南葵音楽文庫紀要』第４号→以下『紀要』④］、最新の研究を反映した総合目録作成を目指しています。また、従来のオークションで競り落としたという記載が誤りで、留学時代の師を通じ購入した事実を、関連資料を提示して明らかにしました［『紀要』①］。

ホルマン文庫：はじめての紹介と自作曲目録

不世出のチェロ奏者が所蔵していた楽譜約1000点については、1970年頃に簡単なリストが作成されました。サン＝サーンス作品の調査［『紀要』①、②］、自作曲の目録作成［『紀要』②］を行い、演奏や調査にも協力しています。

スナール室内楽シリーズの紹介と目録

1920年代に、短期間ながら積極的な楽譜出版をおこなったスナール社（パリ）による室内楽シリーズは、発行時の形態のまま保管されていました。従来まったく言及されなかった楽譜集の紹介とリスト作成［『紀要』①、③］のほか、個別楽譜の紹介文作成、演奏付きの講座を開催しました。

フリートレンダー文庫の紹介と目録

ベルリンの音楽学者マックス・フリートレンダーから譲り受け、1927年に設置された文庫について、その経緯、内容、意義等を解説したうえで、受け入れ以来はじめてとなる目録を作成しました［『紀要』⑤］。

資料紹介

日本の演奏史を支えた楽譜

和歌山における調査研究から、所蔵楽譜が日本における画期的な演奏に用いられていた事実が明らかになりました。これまでに以下について報告しています。ベートーヴェン：交響曲第９番の日本人による初演（1924年11月29日、30日、12月６日、東京音楽学校）［『紀要』②］、日本初の本格的ワーグナー上演となった《ローエングリン》（1942年11月23日～29日、歌舞伎座、藤原歌劇団）［『紀要』⑤］。徳川頼貞『薔庭楽話』で紹介されているR.シュトラウス《アルプス交響曲》初演（1934年10月30日、東京音楽学校）［『紀要』①］、板東俘虜収容所におけるリスト《フン族との戦い》使用楽譜（1919年12月１日、M.A.K.オーケストラ、エンゲル・オーケストラ共演）［『紀要』④］。

貴重資料の紹介と再検討

ベートーヴェン自筆書簡、ヘンデルに帰されている理論的著述［『紀要』①］などを紹介ないし再検討しました。

頼貞と音楽図書館に関わる資料

父頼倫が渡欧中に受贈した日本吹奏楽の師ルルーの楽譜、頼貞が留学中に購入したルソーの『音楽事典』［『紀要』①］、日本初出版のベートーヴェン《月光》、ネイラーの序曲《徳川頼貞》パート譜［『紀要』②］、徳川頼貞自筆の論考３篇［『紀要』③］、頼貞が著者から贈られたダンディ『セザール・フランク』［『紀要』⑤］などを紹介しています。

関連歴史資料

南葵楽堂の建築、『薔庭楽話』の出版をめぐる環境、徳川頼貞が喜多村進に宛てた書簡、頼貞の雑誌掲載著述などを紹介してきました。

重要資料報告会

和歌山における調査研究からは、すでに音楽史の視点で「貴重資料」とされた以外に、いくつもの視点から特に重要な資料が見出されました。そのため、新たにガイドラインを設定し、<重要資料>を選定、毎年報告会を開催しています。その詳細と選定結果を『紀要』にも掲載しています［『紀要』④、⑤］。

論文、調査報告など

『南葵音楽文庫紀要』に、徳川頼貞、父の頼倫、頼貞の協力者、南葵音楽図書館の成立と展開、南葵音楽文庫の特徴などについての論考を毎号掲載しています。

※『南葵音楽文庫紀要』は、第１号をのぞき和歌山県立図書館で配布しています。送付希望の場合は、図書館のウェブサイトでその方法を確認ください。ウェブサイトで閲覧も可能です。

コレクションの尽きせぬ魅力をひらく

５年間におよそ200コマ。ミニレクチャー、定期講座、アカデミー、シンポジウムと名称はさまざまでした。和歌山県公館、重要文化財の旧和歌山県会議事堂（岩出市）、新宮市、橋本市、田辺市にも出向き、和歌山県立博物館のミュージアムトークも担当しました。５名の南葵音楽文庫研究員にゲスト講師が加わり実施した講座は、公共図書館の特殊コレクションとしては前例のない回数でしょう。それでも、研究員はまだまだ語り尽くせていないと感じています。

毎週開講：ミニレクチャー

2017年12月公開開始とともにスタート。2020年3月まで開講。最後の月はコロナ禍により中止になりましたが2022年度に補講中。会場の南葵音楽文庫閲覧室の大きなテーブルを囲み、ときには所蔵資料の展示や説明が、しばしば講師との歓談が続きました。『南葵文華』創刊号に、レクチャーの一覧を掲載しています。配布したレジュメは、和歌山県立図書館の南葵音楽文庫ウェブサイトで公開しています。

定期講座　アカデミーの開講

▲旧和歌山県会議事堂にて開催
講師：中西重裕　2021年3月7日

2017～19年度に定期講座を開講、教室形式の会場で南葵音楽文庫に関わる内容の講義を行いました。2020～22年度は、内容を関連分野に広げるとともに、会場も県下各地にもとめ開講しました。演奏家の実演をまじえた開催もあります。その一部は『南葵音楽文庫紀要』や『南葵文華』に掲載し、講座の記録が後世に残るようにしています。

紀州徳川400年　3点の記念出版

藩祖の紀州入り400年、南葵音楽文庫の3年におよぶ目録入力の完了を機に、世界的な音楽資料コレクションと音楽貢献に生きた徳川頼貞を紹介する書籍3点が同時に発売されました。この3冊により、それまでほとんど知られなかった音楽資料の豊穣、頼貞の先駆的な行動、そして彼の人間味が初めて紹介されました。→[『紀要』③]

Newsletter『南葵文華』のミッション

南葵音楽文庫アカデミーの開講にあたり、講座からの広がりを願って創刊したニュースレターです。表紙、それを開くとメインのコンテンツ、その先に関連記事、最後の裏表紙に関連情報をといったストーリー展開から、あえて6ページで作成しています。アカデミーの広報であり、記録であり、さらにカラー印刷であることを活かして南葵音楽文庫の魅力発信にも役立つように編集しています。各号とも、和歌山県立図書館で入手でき、また南葵音楽文庫ウェブサイトで公開しています。

南葵音楽文庫：資料画像で紹介・映像（動画）で案内

県立図書館南葵音楽文庫のウェブサイトに、デジタル・アーカイブ、文庫案内やシンポジウムなどの関連動画へのリンク集を設けました。今後充実させてゆきます。

シンポジウム、未来塾などで紹介

シンポジウム「南葵音楽文庫～楽しみと学び～」（2018年9月15日）、高校生のための和歌山未来塾「西洋音楽を日本に～徳川頼貞 音楽ために捧げた半生」（2018年12月15日）など、メディア・アート・ホールを会場にした催しを通じてコレクションの魅力や頼貞の貢献を紹介しました。

吹奏楽版　序曲《徳川頼貞》が完成、頒布

頼貞の師E.ネイラーが作曲した序曲《徳川頼貞》（1918年）は、南葵楽堂のオープンには間に合いませんでしたが、2年後のパイプオルガン披露の際に初演されています。作曲からちょうど100年後の2018年、大橋晃一の編曲による吹奏楽版が完成しました。研究員が曲目解説を担当、翌2019年3月に刊行され、和歌山の高校生などにより演奏されています。編曲版の楽譜は無償でダウンロードし、使用できます。

photo：星林高校（森貞昌春）

▲序曲《徳川頼貞》を演奏する和歌山県立星林高校 吹奏楽部
2020年8月8日

読売日本交響楽団和歌山公演

2017年以来、隔年に来和。序曲《徳川頼貞》で始まるプログラムが特徴です。

全国図書館大会和歌山大会

大会テーマ「図書館の歩みとこれから ー南葵から新しい時代へ思いを繋げるー」2020年11月20日～30日（オンライン開催）。南葵文庫紹介の基調講演を含むDVD付きの報告書が作成されました。

メディア協力：新聞、テレビなど

この5年間に、各種メディアによる多数の取材に対応、全国紙、地方紙の記事や番組の作成に協力してきました。また国立国会図書館、日本近代文学館等のために紹介文を執筆しています。

書庫＋閲覧室から世界へ

南葵音楽文庫の利用は、その小さな閲覧室にとどまりません。所蔵資料はOPAC(オンライン蔵書目録)により何時でも何処からでも検索可能となり、国内海外からの利用、問い合わせに対応しています。また資料やその画像は国内、世界に旅立ち、貢献しています。

閲覧室：よみがえる「南葵音楽図書館」

▲南葵音楽図書館時代の貴重な音楽事典や国内や海外の音楽雑誌などが並ぶ書棚

地下書庫に収められていた音楽書、雑誌、楽譜の一部を移設。2021年秋、閲覧室を「南葵音楽図書館」の書棚を彷彿とさせるものにしました。直接手にとり、頼貞直筆のサイン等をたしかめれば、頼貞の熱意と理想を感じとれるでしょう。

※「南葵文華」第５号に詳しい紹介があります。

閲覧室：貴重資料、重要資料の展示

▲若い頼貞が親しみ、購入したオペレッタの楽譜や関連資料の展示

閲覧室内のガラス書棚には、通常は書庫にある貴重資料、頼貞の自筆原稿などの重要資料が展示されています。随時展示替えをおこなっています。

貴重資料：図書館外でも展示

徳川頼貞が購入したオルガンが現存する東京音楽学校旧奏楽堂（東京・上野公園内）で開催された企画展「徳川頼貞の至宝」（2020年）、和歌山市立博物館「お殿様宝箱　南葵文庫と紀州徳川家伝来の美術」(2018年)で展示、また和歌山県立博物館が保管する手稿資料も同館の企画展等で展示されています。

国内、海外からのレファレンス

資料（音楽書、楽譜等）ばかりでなく、『南葵音楽文庫紀要』、『南葵文華』の内容なども含む問い合わせに、図書館は研究員と協働して対応し、調査研究や文化活動に寄与しています。

高精細画像の提供

専門研究者、研究機関の求めに応じ、研究や事業の計画遂行に必要な高精細デジタル画像を提供しています。2022年には、提供画像をふまえたパーセル《ディドとエネアス》の新たな校訂楽譜がロンドンで出版されました。

パーセル協会版《ディドとエネアス》楽譜新版▶

南葵音楽文庫サポーターの５年間

2018年3月4日、同年1月の定期講座での呼びかけに応じ終了後に集った人たちが、研究員が用意した「南葵楽堂の記憶」コンサート（2008年、東京）のビデオを鑑賞、意見交換をおこない活動がスタート。新年度を迎え、『薔庭楽話』私家版と市販版の読み比べをしながら学ぶ読書会を月例で開催しました。内容を更新しながらも現在まで読書会は活動の軸となっています。

並行して、徳川頼貞と南葵音楽文庫に関係した場所や催しを見学。今までに「第九」初演の地である板東やドイツ館見学と現地研究者との交流（徳島）、県立近代美術館や市立博物館における学芸員による解説付き関連資料特別閲覧（和歌山）、研究員との交流会などを開催しました。

「音楽の和歌山」コンサートと交流の集い（緑風舎、2019年）に続き、「南葵音楽文庫ミニコンサート」（県立図書館、2021＆22年）を主催し、和歌山の若い人たちとともにサポーターも演奏協力、研究員の司会により、頼貞および南葵音楽文庫を紹介しました。

南葵音楽文庫サポーターは、会費、会則、会長がなく、活動はサポーター登録者（年度ごとに更新）からの提案により、有志がその都度集まり、自発的に活動をおこなっています。和歌山県立図書館から独立した非営利の任意団体で、図書館および研究員は、南葵音楽文庫の一層の理解や普及のため折にふれ協力、協働しています。

図書館発行のニュースレター『南葵文華』、さらには調査研究を発表する『南葵音楽文庫紀要』には、サポーターの自己研修やそこから生まれた成果が掲載されてもいます。

図書館はしばしば特殊コレクションを所蔵し、なかには専門家による講演会を開催する例があります。しかし、南葵音楽文庫アカデミーと並行しながら連動もする、図書館利用者の自主性、自発性による活動継続は、全国的にも特筆されるべきでしょう。

▼和歌山県立近代美術館で学芸員の説明に耳を傾けるサポーターたち (photo: 中里佳世)

南葵音楽文庫アカデミー秋 聴講記

松田喜久子

2022年11月19日（土）、錦秋の和歌山にて、「和歌山が伝える<南葵の記憶>（第２回）」と冠する、ふたつの興味深い講演を聞いた。

photo: 佐本守

▲徳川頼倫葬儀について長保寺所蔵写真をもとに説明する講師

ひとつは「徳川家と長保寺：頼倫、頼貞を中心に」という、長保寺法嗣である瑞樹弘芳氏のお話。長保寺は自然豊かな山裾にある一万坪の境内に、国宝の建物を３つも抱える、海南市下津の名高い寺である。寺は1000年に建てられたが、紀州徳川家の菩提寺になったのは1666年。初代頼宣から16代頼貞までの墓がここに建てられた。（将軍となった５代吉宗と、13代慶福を除く。）この寺には古くからの貴重な写真や書簡が大量に保管されており、中でも1925年の15代頼倫の葬儀の様子が撮影された写真は、往時の紀州徳川家の財力と人気ぶりを今に示すものだ。講演ではそれらの写真と、現在の境内の該当箇所の写真を見比べ、16代頼貞が喪主を勤めた父・頼倫の大きな葬儀や、墓所造成、四十九日法要までの様子を追った。

筆者は長保寺を２度訪れているが、写真を見て、「あの境内にこんなにたくさんの人が来たの？」と驚くほど、信じられない人の密度だった。そしてそれらの写真は、法要をする法嗣らや、徳川家の方々の装束、大きな棺を担ぐ人々、それらを見守る市井の大人やこどもの様子など、当時の習俗をも知ることができる、非常に価値あるものだった。また墓や階段を作るために、山の上まで巨大な石をたくさん運んだことにも仰天したが、石の運搬方法の記録や写真はなく、詳細は不明らしい。なお、長保寺最寄り駅のきのくに線下津駅は、頼倫の葬儀の折に必要に迫られて作られたということだ。

▲墓所への石段（大正15年3月19日謹写）

もうひとつは、数奇な運命をたどったこの南葵音楽文庫の研究に邁進中の美山良夫氏による「徳川邸にかかわる資料をもとめて」で、頼倫・頼貞の「私邸」の来し方行く末を辿る発表だった。氏は意外にも、当初私邸についてはあまり興味がなかったものの、研究を進めるうちに、彼らが国内外の客人をもてなしたり、音楽家を招いて音楽会を催したり、また南葵育英会の学生を招いて励ましたり、と公私の隔てなく私邸を利用していることの重要性に気づき、資料を集め始めたそうだ。

▲洋館（麻布）
南葵楽堂に先立ち、頼倫が本邸跡地に新築

南葵文庫と共に広大な敷地内にあった頼倫邸 洋館（麻布飯倉）、能舞台もあり和風の贅を尽くした静和園（代々木上原）、紀州東照宮の麓、皇族も泊まられたという双青寮（和歌浦）、眺めの良い、お気に入りのバルコニーのあったヴィラ・エリザ（上大崎）、『薔庭楽話』を執筆した高麗園（大磯）。それら私邸の写真、絵はがきや、希少な資料は、幸運なことに、主に和歌山県内の図書館や博物館などに関係者から寄贈されている。

▲ヴィラ・エリザ（上大崎）
頼貞の文化・国際交流の拠点でもあった（『薔庭楽話』より）

しかし、残念ながらどの私邸も、居住に使われたのは10数年間と、あまり長くはなかった。どれも1920年代前半に頼貞が併用・相続したが、1940年までにほとんど手放している。財政難のためとはいえ、思いがこもった私邸を手放すのはどんなに辛かっただろうか。

ところで氏は最近大磯の高麗園跡を訪ねたそうだ。実はここには熱海に移されたヴィラ・デル・ソル以外の、残された建物がまだあるという。また樹齢300年の巨大なホルトノキが一本保存されている。ホルトノキは温暖な和歌山では知られた木だが、当時この敷地内にそれが何本もあったのは偶然ではなかろう。その日、頼倫らも愛しんだはずのその巨木を氏が感慨深く眺めていると、どこからか現れた老人が、尋ねもしないのに徳川家の昔話をしてくれ、彼が去った後には不思議な温かい人の気配が残る…という体験をしたそうだ。筆者は氏の研究への真摯な愛とまなざしを感じて心温まり、また頼倫らの自然･文化･芸術を愛でる熱い思いと、遺してくれたものらに感謝しつつ、帰路についた。（南葵音楽文庫サポーター）

photo: 佐本守

▲高麗園（大磯）　南方熊楠が訪れ頼倫と語り合った竹の球戯室を紹介する講師

南葵音楽文庫アカデミー 春 のお知らせ
和歌山で公開５年：温故と知新

会場はすべて和歌山県立図書館（本館）２階 講義・研修室
※都合により講師、内容は変更になる場合があります。予めご了承願います。

3月4日(土) 11:00～11:30 **ミニレクチャー**
近藤秀樹「頼貞、カザルス、グラナドス～「大西洋上のパブロ・カザルス」後日談」

13:30～15:30 **講演「和歌山が伝える＜南葵の記憶＞」第３回**
奥中康人（静岡文化芸術大学教授）**「幕末維新期の和歌山における軍楽──太鼓とラッパ──」**
中川委紀子（根来寺文化研究所所長）**「紀州徳川家と根来寺復興──重倫侯御寄進能面──」**

3月5日(日) 11:00～11:30 **ミニレクチャー**
佐々木 勉「南葵音楽文庫で学ぶ西洋音楽史「器楽の発展」組曲」

13:30～15:00 **鼎談「南葵音楽文庫からの温故知新」**
「和歌山の音楽史を発掘する：その試みと今後」奥中康人·江本英雄·林淑姫（司会：近藤秀樹）
「南葵音楽文庫を活かすみち」宮下直子·岩橋和廣·美山良夫（司会：美山良夫）

奥中康人『幕末鼓笛隊 土着化する西洋音楽』
大阪大学出版会 2012 年
幕末鼓笛隊は欧米列強に対抗するために軍楽隊として誕生した。その後廃藩置県により消滅したが、じつは地域社会の祭礼と結びついて今も生き残っている。文化接触による伝統音楽の変容と適応について紹介する。

中川委紀子『根来寺の能面』
監修 田邊三郎助 淡交社 2002 年
和歌山県根来寺に伝来する約 160 面に及ぶ紀州徳川家ゆかりの能面「大名面」の全貌を、和歌山県立博物館での展覧会開催を機に検証する。併せて徳川御三家の能楽の様相も紹介。

https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/

＊催しは全て無料です。
＊ミニレクチャーは事前申込み不要です。
（入り口で所定の用紙に記入願います）。

南葵音楽文庫アカデミー秋 開催報告

「和歌山にある宝と記憶の鉱脈」という全体タイトルのもと、和歌山県が今年から制定した「きのくに文化月間」の一環とし開催。また、コロナ禍により中止されていたミニレクチャーの補講、例年の「重要資料報告会」を併催した。会場はすべて和歌山県立図書館（本館）２階 講義・研修室。

■11月19日(土)のミニレクチャー（講師：林淑姫）では、和歌山県立文書館が新たに収蔵し、展示中の竹之内喜八郎資料の紹介が追加された。**アカデミーの講座**（講師：瑞樹弘芳、美山良夫）については、松田喜久子氏の報告をご覧いただきたい。

■11月20日（日）のミニレクチャー（講師：美山良夫）は、徳川頼貞とまったく同時代を生き、ともに私財を投じて、比類ないコレクションを築いた池長孟。ふたりの相似性、蒐集の公共性が語られた。**南葵音楽文庫研究員による重要資料報告会**では、以下の資料について報告があった。そのうちウォーカーの著作（カミングス文庫より）は、既に『所蔵目録-貴重資料』（1970年）に掲載されている。

◎田中正平『純正律の研究』（林淑姫）、◎クレメント・ウォーカー『1640年に始まった議会についての歴史的、政治的考察』1648年（佐々木勉）、◎徳川頼貞『指揮者ヘンリー・ウッドに関して』（自筆原稿）（篠田大基）、◎W. A. モーツァルト作品全集（17巻、1798-1806年）（美山良夫）。

▲プログラム表紙

photo: 佐本守

南葵音楽文庫ミニコンサート第２回
「徳川頼貞　初々しい体験を胸に」

南葵音楽文庫サポーター有志主催、和歌山県立図書館共催の南葵音楽文庫ミニコンサートが、11月20日、重要資料報告会にひきつづき開催された。今回は、和歌山市、和歌山市教育委員会の後援、和歌山南ロータリー·クラブの協賛を得ての開催となった。また、ミニコンサートもアカデミー「秋」と一体なものとし、「きのくに文化月間」の一環としての開催になった。

この催しは、和歌山の若い人たちが、演奏を通じて南葵音楽文庫と親しむ機会を提供するというサポーター有志の開催趣旨に図書館が協働し、事前の会場練習日にあわせて、若い人たちのための南葵音楽文庫閲覧室および書庫の見学機会を設けた。閲覧室はサポーターが、書庫は研究員が説明役を引き受けた。

ミニコンサートの司会進行は昨年同様、近藤秀樹（南葵音楽文庫研究員）。当日の来聴者は111名で、今年も大変好評であった。

ピアノ連弾▶
R. ワーグナー
「結婚行進曲」
photo: 佐本守

南葵文華第８号
令和５年２月21日発行

発行所
和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集
合同会社芸術資源研究所
〒640-8137 和歌山市吹上1-1-22 502号室

編集協力
有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36